

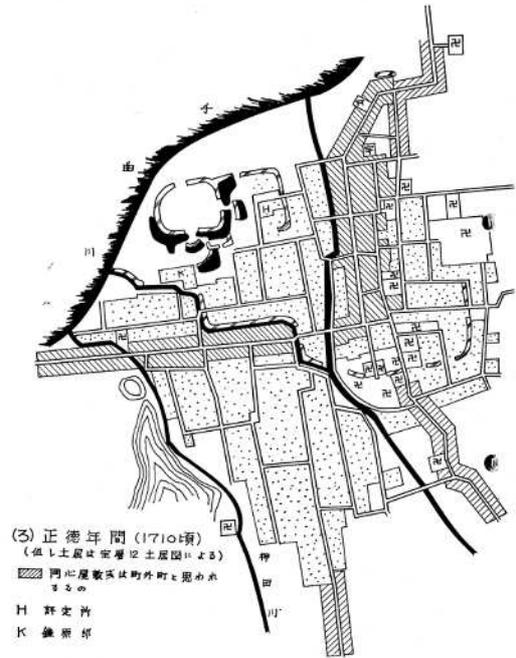
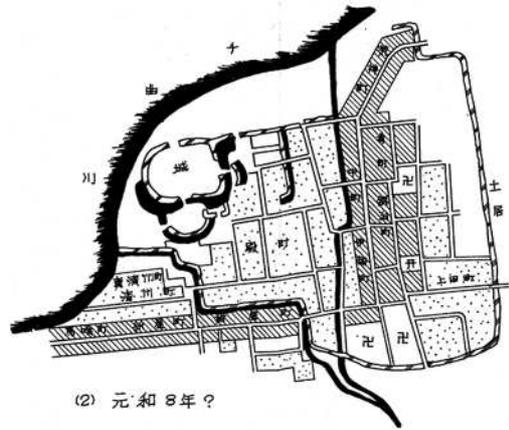
城下町松代と松代道^{みち}にみる歴史的風致【若穂川田地区】

1 はじめに

松代城は、北を流れる千曲川を自然の要害として築かれた平城で、最奥部に本丸を置き、南東側の城下に向けて二の丸、三の丸と呼ばれる^{くるわ}曲輪を重ねる城郭となっている。

元和8年（1622）に真田信之が上田（上田市）から移封し、松代藩真田家の初代藩主となる。真田家の移封前から城下町は、ある程度に形づくられていたが、信之は上田から真田家ゆかりの寺社を松代城下へ移して組み込み、町を再編していったと考えられている。その後も城下町の整備や領内統治が進むにつれて松代は、北信濃支配の拠点として重要な役割を担うようになっていき、明治時代の廃藩まで10代、約250年の間、真田家によって治められた。

また、松代は、中山道の脇街道である北国街道（北国往還）の宿駅として流通の拠点ともなり、街道沿いに町人地が広がっていき、次第に町が南へ広がるにつれて町の発展とともに武家や町人の文化が育まれた。



松代城下町の変遷

（「松代の民家」(昭和45年(1970))

2 街道と宿場について

^{なかせんどうおいわけ}中山道追分宿（軽井沢町）から金沢を結ぶ北国街道は、小諸、上田、坂木（坂城町）の各宿を通り、矢代宿（千曲市）を過ぎて二つに分かれる。

一つは、松代城下、川田宿を通り、福島宿（須坂市）の北の布野の渡しで千曲川を渡り長沼宿から牟礼宿（飯綱町）に向かう道であり、もう一つは、矢代の渡しで千曲川を渡り、丹波島宿から市村の渡しで犀川を越

えて善光寺宿から牟礼宿に至る道である。前者は、天正 11 年（1583）に上杉景勝が川中島平に進出するために整備した軍事目的の強い道で、江戸時代初期まで主要道であった。慶長 16 年（1611）の北国街道の宿駅設定により、松代道とともに善光寺道も公認され、次第に善光寺を通る道が主となっていった。松代道は、主に犀川の洪水による舟留めのときの迂回路として利用されたため、雨降り街道とも呼ばれていた。

3 川田宿について

川田宿は、松代城下から北東 2 里（約 7 キロメートル）に位置する。江戸時代前期は、千曲川沿いに宿場が形成されていたため水害を受けることが多く、元文 4 年（1739）に南へ約 200 間（約 364 メートル）移動した。

宿場の道筋は、北に開かれたコの字状で、現在もその地割が鮮明に残っている。宿場は、上横町、本町、下横町からなり、上横町の街道入口には、松代藩の口留番所が置かれ、千曲川を渡る関崎の渡しや隣接する須坂藩との間で往来する人や荷物の改めを行っていた。

4 活動（火防）

（1）秋葉山祭り

川田宿では、火防意識が高く、火防の神である秋葉信仰が現在も色濃く残っている。宿場の本町の両端に建つ秋葉社は、長大な自然石の中に一本の柱を埋め込み、その上に龍の透かし彫りなどの精巧な意匠を施した檜製のもので、善光寺山門の造営にも参加した郷土の名工、亀原和田四郎の作と伝えられている。

秋葉山祭りは、毎年春と秋に行われる。共楽社（上組）と祭典連（下組）と呼ばれる若衆組が中心となり、上組、下組の 2 箇所秋葉社の前にやぐらを組み秋葉山



秋葉社（左が上組、右が下組）



総門（灯籠門）

大権現の幟を立てる。

かつては、毎年の秋祭りになると互いに総門（灯籠門）を造り、出来栄を競い合っていたが、近年は高齢化により、数え年で7年ごとの町川田神社の御柱祭の際に併せて設置されている。

(2) 町川田神社の御柱祭

令和4年(2022)に予定されていた町川田神社の御柱祭は、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったため、ここでは、平成28年(2016)に行われた御柱祭の内容を記載する。

御柱祭の一週間前になると、寄進された長さ約20メートルの杉の大木2

本を氏子数十名で伐採し、山出しが行われる。御柱は、氏子総代によって選ばれた上組、下組の宿主宅前にしめ縄を張って安置される。

御柱祭当日の早朝に各宿主宅前で神前祭を行い、里曳きの出発場所まで御柱を曳行する。午前10時を過ぎて2本の御柱が整うと、盛大な里曳きが始まる。



町川田神社の御柱祭（昭和7年）



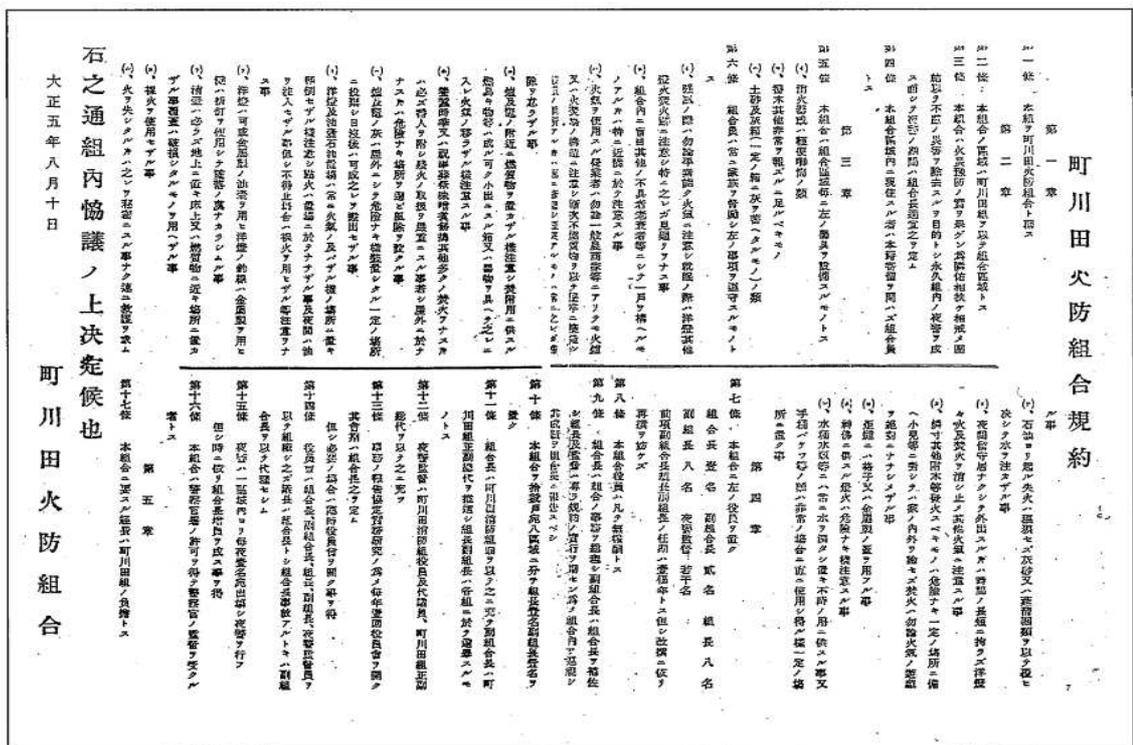
左右に振りながら御柱を曳く
(紺色の法被が壺之柱、赤色の法被が式之柱)

(3) 火防組合

川田宿のある町川田区では、火防の秋葉信仰と併せて、地域住民により火防組合が古くから組織されていた。発足当初の資料は少ないが、資料として大正5年（1916）の町川田火防組合規約が残っている。

規約には、遵守事項が17項目あり、強風の際はもちろんのこと、平素から火気に注意して就寝の際は見回ること、養蚕の時期、祝い事、葬祭、味噌仕込み等、火をよく使うときは、必ず番人を置いて残り火の取扱いに注意することなど、細かく注意点を挙げている。

現在も消防団とは別に町川田火防組合が組織されて全戸が輪番で当番を受け持つ夜警活動を続けている。火災の起きやすい乾燥する春先になると、複数の家庭が川田宿の中心に位置する公民館に集合したあと、宿場の東側と西側の二手に分かれて拍子木の音とともに、町川田区全域を見回る姿が毎晩のように見られる。



町川田火防組合規約（大正5年（1916））

5 建造物

(1) 町川田神社

まちかわだ
町川田神社は、諏訪明神、建御たけみ
な名方命を祭神としており、明治
9年(1876)に諏訪宮から改称し
た。南側の山を背にした傾斜地
に本殿、祝詞殿、拝殿が直線に並
び、参道の東側に弥栄社、神庫、
社務所(町川田第二公民館)が配
置されている。境内に文政8年
(1825)に大本願から寄進を受
けた灯籠が立ち、弘化4年
(1847)の善光寺地震で石造鳥居が倒壊したことが、往時の日記に記さ
れている。



まちかわだ
町川田神社

(大正7年(1918))

現在の建物は、大正7年(1918)に再建され、境内入口に神社再建の石
碑がある。また、拝殿には、屋根の葺き替えを記した昭和17年(1942)
の棟札があり、その後、茅葺屋根の上に鉄板葺を施したものと考えられ
ている。

(2) 西澤家

西澤家は、宿場の中央に位置
し、本陣と問屋を務めた。主屋
は、明治2年(1869)の火災で焼
失したが、明治30年代に再建さ
れた。西澤家には、松平加賀守、
松代藩主、須坂藩主、測量で訪れ
た伊能忠敬が立ち寄った記録が
残っている。



西澤家(明治30年代)

街道沿いの隣地に高札場があり、そこから西向きに眺望した景観は、
長屋門入口を中心に土蔵造りの2棟の建物が、連続する山並みのような
姿を形づくっている。

(3) 北村家住宅（登録有形文化財）

北村家の主屋は、明治 20 年（1887）の建築で、木造二階建、瓦葺である。土塗り壁と黒く塗られた下見板、腰板、外壁の 2 つの土蔵を連絡した長屋門が街道に面して建っている。主屋は、大正中頃から郵便局舎として使われ、切妻状のむくり屋根が残る。長屋門の西側土蔵壁面に扉があり、門内部は倉庫として利用されていた。



北村家住宅（登録有形文化財、明治 20 年（1887））

6 まとめ

松代城下町と北国街道松代道^{みち}で結ばれる若穂川田地域には、松代藩領川田宿が置かれ、宿場の地割りや秋葉社、本陣等の歴史的まちなみと火防信仰、祭礼とが一体となって生活に深く浸透した風致が見られる。

そのほか、地域住民が主体となり、建造物や祭礼などの地域資源を活用してまち歩き観光の冊子やパンフレットの発行、ガイド活動、講座の開催など地域の歴史や文化を



川田宿ガイドの会の活動の様子

守り伝える取り組みが行われているほか、松代地区では毎年まつしろ景観賞を開催して歴史的なまちなみに調和する建造物を顕彰している。

このように、城下町松代を中心として、松代とともに発展した街道の宿場にも、長きにわたり受け継がれてきた良好な歴史的風致を見ることができる。